

要点

古文・文脈把握

今回の学習すると……

古文において、**文脈に即した読解ができる**ようになります。

【1】主語を正しくとらえて読む

古文に書かれている場面や情景を読み取るためには、「何(だれ)が(主語)・どうした(行為の内容)」を理解する必要があります。

●主語をおさえる

古文では主語が省略されやすいので、主語を見つけられるかどうかで読解に大きく差がつかます。主語を見つけたときには、「〜が・〜は」はもちろん、次の点に注意しましょう。

①主語を示す「が」が省略されることが多い

(例) 山ぎは(が)少しあかりて↑「が」を補う。

②主語を表すのに「の」が使われることが多い

(例) ほたるの(の)多く飛びちがひたる↑「が」と置き換える。

③述語が省略されることが多い

(例) 春はあけぼの(「が」をかし)↑前後の関係から補う。

●主語を判断する手がかりになる接続助詞

接続助詞の中には、文章の流れを切らずに単純に下に続けていくはたらしきをするものと、文章の流れをいったん切り、改めてあとにつなげるはたらしきをするものがあります。

文の流れが切れるということは、そこで主語が変わる可能性が高いということです。これらの助詞が出てきたら、①それまでの主語は何(だれ)であったか、②主語が変わるかどうか、③主語が変わるのであれば何(だれ)に変わるのか、という点に注意して考えるようにしましょう。

「**て・で・つつ**」など

文章の流れを切らずに単純に下につなげる接続助詞。前後の主語は基本的に同一となる。

「**ば・ど・が・に・を**」など

文章の流れをいったん切ってつなげる接続助詞。前後で主語が転換することが多い。

主語をおさえることができたなら、人物の行為の内容を読み取ります。そのために、行為の起こった時間にも目を向けてみましょう。

【2】時間軸を意識して読む

「何(だれ)が・どうした」の、「どうした」の部分の確にとらえるためには、その部分の叙述が、現在・過去・未来のいずれについて語っているのかに注目することが大切です。すでに実現し、確定した事柄について述べているのか、まだ実現していない、未確定の事柄について述べているのかを意識して読み進めましょう。

●仮定と確定の表現「は」「とも」「ど・ども」

接続助詞「は」「とも」「ど・ども」は、それぞれ次のような用法があります。

・未然形＋「ば」 ↓ 順接の仮定条件 (もし) ～なら
 ・已然形＋「は」 ↓ 順接の確定条件 ①原因・理由(～ので)

②偶然条件(～たところ)
 ③恒常条件(～といつも)

・終止形＋「とち」 ↓ 逆接の仮定条件 (たとえ) ～ても
 ・已然形＋「ど・ども」 ↓ 逆接の確定条件 (～けれども)

●過去・完了の助動詞「き・けり」「つ・ぬ・たり・り」
 すでに実現し、確定した事柄を表現するとき用いられる助動詞には、次のようなものがあります。

・「き」 ↓ 自分が直接経験した過去の出来事を述べる。
 ・「けり」 ↓ 間接的に知った(伝聞した)過去の出来事を述べる。
 ・「たり・り」 ↓ 動作の完了、または動作の存続を述べる。
 ・「つ・ぬ」 ↓ 動作・状態の完了を述べる。

※「つ・ぬ」＋推量の助動詞(「む(ん)」「べし」など) ↓ 強意を表す

●推量・意志の助動詞「む(ん)」「べし」

助動詞「む(ん)」「べし」は推量の助動詞と呼ばれ、**まだ実現していない、未確定の事柄を推し量る表現**に用いられます。また、意志の意味もあり、これは**未来に向けてある事柄を実現させたい、という自分自身の気持ちを表します**。

「む(ん)」「べし」には、この他にも主に次のような用法があります。

む ↓ 推量(～だろう) 意志(～しよう)
 仮定・婉曲(～としたら・～ような)
 べし ↓ 推量(～だろう) 意志(～しよう) 可能(～できる)
 当然(～はずだ) 適当(～のがよい) 命令(～せよ)

これらの用法は、いずれもまだ実現していない、未確定の事柄を表現するという共通点があります。(推量) **まだ確定していない事柄を表現する助動詞**という大まかな分類を理解して、文脈に合わせた訳し分けをしていくことが大切です。

○「む(ん)」「べし」の活用表

	む(ん)	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
べし	○	○	○	む(ん)	む(ん)	め	○
べから	(へく)	べく	べかり	べし	べき	べけれ	○

●打ち消しの表現「ず」「じ」「まじ」

「ず」は打ち消しの意味をもつ助動詞ですが、その「ず」に「む」「べし」のもつ推量・意志のニュアンスが加わったものが、助動詞「じ」「まじ」です。どちらも「……ないだろう」「……ないつもりだ」などと訳し、まだ表現していない事柄についての推量や、話し手の意志を表します。

○「ず」「じ」「まじ」の活用表

	ず	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
まじ	○	○	○	じ	ぬ	ね	○
まじから	(まじく)	ざら	ざり	まじ	ざる	ざれ	○
まじかり	まじく	まじ	まじ	まじ	まじき	まじけれ	○

【3】文脈を正しくとらえて読む

●文脈に即した意味を選ぶ

古文の中には、一語の中に多くの意味を含むものがあり、文脈に即して、適切な意味を選ぶ必要があります。

例文で確認！

あないみじ。犬を藏人二人して打ちたまふ。

(「まあひどい。犬を藏人二人で打ちなさる。」)

『枕草子』

「いみじ」には、①はなはだしい・並々でない、②よい・すばらしい、③ひどい・恐ろしい、などの意味があります。例文は、(藏人二人が犬を打ちのめしている) ことについて、「いみじ」と発言している場面です。③ひどい・恐ろしい、という意味になります。

②よい・すばらしい、は③と真逆の意味なので、文脈を正しく把握していないと、誤読してしまう可能性があります。複数の意味をもつ古語には注意が必要です。

以下に例を挙げるのは複数の意味をもつ古語なので、辞書を引いて意味を確認しておきましょう。

いみじ・ゆゆし・わりなし・あはれなり・かなし・いとほし・はづかし・かしこし・おぼつかなし・やさし・こころもとなし・うるさし・しどけなし など

● 古文の指示語

古文でも現代文と同様に、指示語が出てきたら、それが指している内容を明らかにして読み進めることが、文脈をおさえるうえで非常に大切です。古文でよく使われる指示語についても確認しておきましょう。

古文でよく使われる指示語

こ〈これ・ここ〉 そ〈それ・そこ〉 か〈あれ・あちら〉
 かく〈このように〉 さ／しか〈そう・そのように〉
 かかり〈かく十あり〉 しかり〈しか十あり〉

ポイント 古文の文脈把握のしかた

- ・ 主語を正しくとらえて読む。
- ・ 時間軸を意識しながら、文脈に即した助動詞・助詞の意味を選ぶ。
- ・ 前後の内容から、文脈に合った古語の意味や指示語が指すものを推測する。

古文：文脈把握

例題

次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

ある*越後みちごの農人、おのれが田地のうちに病める鶴ありて死に至らんとするを見つけ、たくはへたる*人參にんじんにて鶴の病を養ひしに、日あらず癒えて飛び去りけり。さて、翌年の十月、鶴二羽、かの農人が家の庭近く舞ひくんだり、稲二莖を落とし、一声づつ鳴きて飛び去りけり。

(1) 拾ひ取りてみるに、その丈*六尺にあまり、穂もこれにつれて長く、一枝に四、五百粒もあり。農人思ふやう、さては去年の病める鶴、恩に報はんとて、異国よりくはへ来たりしならん。何にもあれ、いとめづらしき稲なりとて、苗のころにいたり心をつくして植糸付けけるに、鶴が与へしに変はらずよく生ひ出でけり。

『北越雪譜』

5

注 *越後みちご 現在の新潟県。

*人參にんじん 生薬の材料となる薬草の根。

*六尺むくし 一尺は約三十センチメートル。

問一 傍線Xの「ん」について、文法的意味を書きなさい。

問二 傍線(1)は「拾い取ってみると」という意味ですが、誰が何を拾い取ったのですか。文中から抜き出して書きなさい。

誰がん

何をん

次のページで「解答解説」を確認しましょう。

解説

問一 助動詞「ん(む)」には推量、意志などの意味がありますが、傍線部は、鶴の心中を農人が想像している部分にあります。(鶴が、去年看病してもらった恩返しをしようとして、異国から稲を持ってきたのだろう、と農人が思った)ということですから、ここの「ん」は意志の意味でとらえます。推量ととらえると、「鶴が、恩に報いるだろう」ということで、稲を持ってきたのだろう」となり、不自然です。

問二 冒頭から意味をとらえていきましょう。越後の農人の田地にいた病気の鶴を、農人が蓄えておいた人参を食べさせて看病してやったところ、鶴は病気が治って飛び去りました。翌年、農人の家の庭の近くに鶴がやってきて、稲を落として飛び去っていました。この話には「農人」と「鶴」しか出てきていないので、主語はこのどちらかになります。また、目的語も答える必要があるので、「何を」拾い取ったのかもあわせて確認しましょう。

傍線部の直前に注目します。

問題文の(1)を見よう！

稲二茎を落とし、一声づつ鳴きて飛び去りけり。

←

(1) 拾ひ取りてみるに……

「鳴きて」「飛び去りけり」とあるので、鳴いて飛んでいったのは鶴だと考えられます。よって、「拾ひ取って見た」のは地上にいる「農人」です。「稲二茎を落とし」とあるように、鶴は飛び去る前に稲二茎を落としていたので、農人が拾ったのは、この「稲二茎」ですね。

口語訳

ある越後の農民が、自分の田地の中に病んでいる鶴がいて死にそうなのを見つけ、蓄えている人参で鶴の病を養生させたところ、何日もたずに病が癒えて(鶴は)飛び去った。さて、翌年の十月、鶴が二羽、あの農民の家の庭近くに舞いおりて、稲二茎を落とし、一声づつ鳴いて飛び去った。(農民が)拾い取ってみると、その丈は六尺以上もあり、穂もこれにつれて長く、(実は)一枝に四、五百粒もある。農民が思うことには、「さては去年の病気の鶴が、恩返しをしようとして、異国からくわえて来たのだろう。いずれにしても、大変珍しい稲だ」と思って、苗の時期になると心を尽くして植え付けたところ、鶴がくわえて持ってきた稲と変わらずよく生長した。

解答

問一 意志

問二 誰がⅡ(越後の)農人 何をⅡ稲二茎

練習問題

次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

これも今は昔、門部府生かどべのふしやうといふ舎人*ありけり。若く身は貧しくてぞありけるに、まきぎを好みて射けり。(a)夜も射ければ、わづかなる家の葺板*を抜きて、灯ともして射けり。妻もこの事をうけず、近辺の人も「あはれ、よしなき事し給ふものかな」と言へども、「我が家もなくてまどはむは、誰も何か苦しかるべき」とて、なほ葺板を灯5して射る。これをそしらぬ者一人もなし。(1)かくするほどに、葺板みな失せぬ。

『宇治拾遺物語』

注 *舎人⇨下級の役人。

*まきぎ⇨弓の種類。

*葺板⇨屋根に使われている板。

問一 傍線(a)(b)を口語訳しなさい。

(a)

(b)

問二 傍線(1)を、「かくする」の指す内容を明らかにして口語訳するとどうなりますか。次の空欄にあてはまる内容を書きなさい。

夜に弓を射るために

いるうちに

解説

問一 (a) 「射ければ」の「ば」の部分に注目します。傍線(a)は、「ば」の上に、過去の助動詞「けり」の已然形「けれ」があるので、確定条件で訳しましょう。さらに、確定条件は、文脈によって訳しかたが異なりますので、前後の文脈を読み取り考えましょう。

問題文の「」を見よう！

門部府生……まききを好みて射けり。

(a) 夜も射ければ、わづかなる家の葺板を抜きて、灯して射けり。

傍線部のあとに、〈小さな家の葺板を抜いて、灯して射た〉と述べられています。門部府生は、まききという弓を好んで射ており、夜でも弓を射るために、家の屋根の板を抜いて、それに火を灯して明かりにされていました。よって、傍線部は、直後の文に対する〈原因・理由〉が述べられているので、〈夜も射たので〉と訳します。

(b) 逆接の確定条件を示す「ども」が含まれているのがポイントです。

「ども」はまれに逆接の仮定条件で使われることがあります。傍線部は「近辺の人々」の会話文のあとに続く箇所、すでに実現されたことを示しているので、逆接の確定条件として〈言うけれども〉と訳します。「言っても」と訳すと、逆接の仮定条件になってしまうので、注意しましょう。

問二 「かくするほどに」は〈そのようにするうちに〉という意味です。前後の文脈を読み取りながら、指示語の内容を具体化しましょう。

問題文の「」を見よう！

かくするほどに、葺板みな失せぬ。

←理由

- ・夜も射ければ、わづかなる家の葺板を抜きて、灯して射けり。
- ・なほ葺板を灯して射る。

「かくする」は、葺板がすべてなくなってしまうことにつながるもので、何をしたことにより「葺板みな失せぬ」状態になったのか考えます。問題文の前半で、門部府生が〈夜でも弓を射るために、家の屋根の板を抜いて、灯して射た〉ことや、それを見た近所の人々が「ああ、ひどいことをなさるものだ」と言っても、葺板に火を灯して射ていたことが語られていました。「かくする」は〈夜に弓を射るために、自分の家の葺板に火を灯す〉ことを指し、そうしているうちに、自分の家の葺板は、すべてなくなってしまうたのですね。

口語訳

これも今となつては昔のことだが、門部府生という下級の役人がいた。若くて身は貧しかったが、まきき（という弓）を好んで射た。夜も射たので、小さな家の葺板を抜いて、（その板に火を）灯して射た。妻もこのことを受け入れず、近所の人々も、「ああ、ひどいことをなさるものだ」と言うけれども、「我が家もなくて路頭に迷おうと、誰も何か不都合なことがあるうか（いや、ないだろう）」と言って、やはり葺板を灯して射る。このことを非難しない者は一人もいない。そうしているうちに、葺板は全部なくなつてしまった。

解答

問一 (a)夜も射たので

(b)言うけれども

問二 (夜に弓を射るために) 自分の家の葺板を抜いて灯して(いるうちに)

「要点」で学習した内容をふまえて、問題を解いていきましょう。

読解演習

次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

源頼光に仕える平貞道・平季武・坂田金時の三人の侍は勇猛で知られていた。この三人が、ある時「賀茂の祭の帰さ」を見たいと思い、馬に乗って行くわけにもいかなないので、牛車を仕立てて内緒で見物にでかけた。

*紫野むらのさまに遣やらせて行くほどに、*三人ながら、いまだ車にも乗らざりける者どもにて、*物の蓋ふたに物を入れて振らむやうに、三人振られ合ひて、*あるいは立板たていに頭を打ち、あるいは(1)おのれらどち頬ほを打ち合はせてのけざまに倒たふれ、うつ伏し(2)ぎまにうつ伏し(3)くるめきて行くに、(2)すべて堪たふべきにあらず。かくて紫野に行き着きて、*車か搔かき下ろして立てば、あまり疾とく行き立つれば、*事成るを待つほどに、この者ども、車酔かひたる心地どもなれば、極めて心地悪しくなりて、目くるめきてよろづの物逆さかさまに見ゆ。(3)いたく酔ひにければ、三人ながら尻しりを逆さかさまに寝入りにけり。しかる間に、事成りて物ども渡るを、死にたるやうに寝たる者どもなれば、(4)つゆ知

10

らでやみぬ。事果てて*車ども懸かけ騒さわぐ時になむ、目覚めて驚きたり

A

『今昔物語集』

注

- *賀茂の祭の帰さ＝賀茂神社の祭礼の二日目に、賀茂の齋院さいいん（賀茂神社に仕える未婚の皇女または王女）が賀茂神社から紫野の齋院御所へ帰る時の大規模な行列。
- *紫野さまに＝紫野に向けて。
- *三人ながら＝三人とも。
- *物の蓋に物を入れて振らむやうに＝箱のふたに物を入れて振り回すように。
- *あるいは＝あるときは。
- *くるめきて＝目を回して。
- *車搔き下ろして立てば＝牛車から牛をはずして、路傍に車を立てておいたところ。
- *事成る＝齋院の行列がやつてくる。
- *車ども懸け騒ぐ時に＝帰り支度のために牛車に牛をつけるなどして周囲が騒がしくなっている時に。

問一 傍線(1)とありますが、三人はなぜこのような状態になったのですか。六十字以内で説明しなさい。

問二 傍線(2)とありますが、どういふことですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号を書きなさい。

- ア 三人は車の中で身を支えることもできず、まったくたまったものではなかったということ。
- イ 三人は全員がひとかたまりになって身を支え合うしかなく、とても大変だったということ。
- ウ 三人は初めて車に乗る喜びをこらえられずに、飛び上がったのはしゃいでいたということ。
- エ 三人は車に乗る危険性を一部始終体験して、ふるえあがってしまったということ。

--

問三 傍線(3)を口語訳しなさい。

--

問四 傍線(4)について、言葉を補ってわかりやすく口語訳しなさい。

問五 空欄Aには、過去の助動詞「けり」を活用した語が入ります。適切な形に直して書きなさい。

問六 問題文の内容と合致するものを次の中から一つ選び、記号を書きなさい。

ア 牛車に乗ったことのない三人の武士は、賀茂の祭をちょうどよい機会と考えて、ぜひ牛車を体験してみようと話し合っって牛車に乗ったまではよかったが、道の途中で牛に振り落とされてしまった。

イ 牛車に乗ったことのない三人の武士は、賀茂の祭の行列を見るために初めて牛車に乗ったが、車の揺れが心地よくてうとうとしてしまい、気づいたときにはすでに行列は通りすぎたあとであった。

ウ 牛車に乗ることに慣れていなかった三人の武士は、賀茂の祭の行列を見るために乗った牛車でさんざんなめにあい、そのうさばらしに行列を待っている間に酒を飲んで酔いつぶれてしまった。

エ 牛車に乗ることに慣れていなかった三人の武士は、車の中でどのように体のバランスを取ったらよいかわからなかったために具合が悪くなってしまい、賀茂の祭の行列を見のがしてしまった。

次のページで「解答解説」を確認しましょう。

解答

問一 三人とも車に乗り慣れておらず、箱のふたに物を入れて振り回すように、三人一緒に車の揺れにほんろうされてしまったから。(57字)

問二 ア

問三 ひどく酔ってしまったので

問四 祭の行列が通ったことをまったく知らないで終わってしまった

問五 ける

問六 エ

解説

問一 最初に傍線部を口語訳してみましよう。

まず「おのれらどち」ですが、「おのれ」は〈自分自身〉ということ、「ら」は複数を表す接尾語です。「どち」も接尾語で同類のものをまとめるはたらきがあり、〈同士〉という意味を表します。ここでは「おのれらどち」は〈自分たち同士・お互いに〉と、三人の武士たちのことをまとめていう表現になっています。

「頬を打ち合はせてのけざまに倒れ、うつ伏しざまにうつ伏しくるめきて行く」ですが、「のけざまに」は〈あお向けに〉、「うつ伏しざまに」は反対に〈うつぶせに〉、「くるめきて」は注にあるように〈目を回して〉という意味であり、〈顔をぶつけ合ってあお向けに倒れたり、うつぶせにうつぶしたりして目を回して行く〉という意味になります。

このような状態になった原因は、傍線部の前に書かれています。

問題文の「こ」を見よう!

三人ながら、いまだ車にも乗らざりける者どもにて、物の蓋ふたに物を入れて振らむやうに、三人振られ合ひて、あるいは立板たていたに頭を打ち、あるいは(1)おのれらどち頬ほを打ち合はせてのけざまに倒れ……

三人の武士は牛車に乗り慣れていなかったために、三人とも車の中でバランスをとることができず、まるで箱のふたに物を入れて振り回したときのように、三人一緒に車の揺れにほんろうされてしまったため、傍線部のような状態になったのです。なお、「立板に頭を打ち」については、「あるいは……、あるいは……」という表現で傍線部と並列関係にあることがわかるので、傍線部の原因には含まれません。ちなみに、「立板」というのは牛車の内側の窓の下についている板で、そこに「手がかり(＝手をかける所)」があり、それをつかんで体を支えたそうです。三人はそういう決まりも知らなかったため、いつそう悲惨な目にあつたのでしょう。

解答では、〈三人がそもそも牛車に乗り慣れていなかった〉ことと、〈箱のふたに物を入れて振り回すように、車の揺れにほんろうされてしまった〉ことを制限字数に合わせて説明しましょう。

○つけのポイント

① 三人が〈車に乗ったことがない・車に乗り慣れていない〉ことを説明できているか。

② 〈箱のふたに物を入れて振り回すように〉と三人が振り回されるさまを説明できているか。

③ 三人が〈車の揺れにほんろうされ、抵抗できなかった〉ことを説明できているか。

④ 文末の形は「……から。」「……ため。」「……理由を表す文末+」になっているか。

【こんな解答は△】

△まるで箱のふたに物を入れて振り回すように、三人が乗った牛車が激しく揺れたから。(39字)

*①と③にあたる内容が不足しています。牛車が激しく揺れたことに加えて、そもそも三人が車に乗り慣れておらず、牛車の揺れに抵抗できなかったために、傍線部のような悲惨な目にあってしまったのです。

問二 傍線部の言葉を順に見ていきましょう。「すべて」は、下に打消

の意味の語を伴って(まったく……ない)という全否定の意味を表す、呼応の副詞です。ここでは打消の助動詞「ず」と呼応しています。「べし」は助動詞で、推量・意志・可能・当然・適当などたくさんの意味がありますが、打消の意味をもつ語とともに使われると、多くは(……できない)という不可能の意味になります。「堪ふ」は「耐ふ」と同じで、(こらえる・我慢する)という意味です。以上をふまえると、傍線部は(まったく耐えることができない)という意味になります。

設問ではさらに具体的な説明を求められていますので、傍線部までの展開を確認しておきましょう。

- ・箱のふたに物を入れて振った時のような様子で、三人一緒に振り回される
 - ・車の立板に頭を打ちついたり、お互いに顔をぶつけ合ってお互うに倒れたり、うつぶせになって目を回したりする。
- ← 「すべて堪ふべきにあらざ」

三人の武士は初めて牛車に乗って、体のバランスをとることができず、揺れにほんろうされて、ぶつかったり倒れたりして目を回していたのでしたね。傍線部が牛車の中の三人の様子に続くものであることをふまえて、選択肢を確認すると、Aは前半の内容も文脈に合っており、後半の「まったくたまったものではなかった」も、傍線部の全否定と不可能の意を正しく反映しているので、これが正解です。

選択肢を手エック!

- ア 三人は車の中で身を支えることもできず、まったくたまったものではなかったということ。
- イ 三人は全員がひとかたまりになって身を支え合うしかなく、とても大変だったということ。
- ウ 三人は初めて車に乗る喜びをこらえられずに、飛び上がってはしゃいでいたということ。
- エ 三人は車に乗る危険性を一部始終体験して、ふるえあがってしまったということ。

イは「ひとかたまりになって身を支え合う」様子は問題文に書かれておらず、不適切。ウは、「初めて車に乗る喜び」も「飛び上がってはしゃいでいた」も文脈にまったく沿っておらず誤りです。エは、「ふるえあがってしまった」が傍線部の訳から離れすぎており、文中にも根拠がない内容です。

問三 まず、接続助詞「ば」の用法を確認しておきましょう。「ば」は二種類の意味をもち、接続する語の活用形の意味が決まります。

未然形＋「ば」 ↓ 仮定条件（もし～ならば）
 已然形＋「ば」 ↓ 確定条件（～ので、～すると）

確定条件を表す「ば」は、現代ではほとんど使われていない形ですが、古文では頻出なので注意が必要です。

傍線部で用いられている語を順に見ていくと、「いたく」は、形容

詞「いたし（甚し）」の連用形からきた副詞で、程度がはなはだしいことを表し「たいそう・ひどく」と訳します。「酔ひ」は、終止形は「酔ふ」で、ハ行四段活用の動詞です。訳は「酔う」のままですが、歴史的仮名遣いで書くと「ゑふ」となり、「よう」と読みます。「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形、「けれ」は過去の助動詞「けり」の已然形で、「にけり」であわせて「……してしまった」の意になります。「ければ」は、「已然形＋ば」ですから、確定条件で訳します。全体をまとめると「ひどく酔ってしまったので」となります。

問四 まず単語ごとに意味を確認していきましょう。「つゆ」は、下に打消の意味の語を伴って、「まったく……ない」という全否定の意味を表す呼応の副詞です。ここでは打消の接続助詞「で」と呼応して、「まったく……ないで」という意味を表しています。「やみ」は動詞「やむ（止む）」の連用形で、「終わる」ということ。「ぬ」は文末にあり、さらに四段活用動詞「やむ」の連用形に接続していることから、「……た……してしまった」と訳す、完了の助動詞「ぬ」の終止形だと判断できます。以上をふまえて傍線部を逐語訳すると「まったく知らないで終わってしまった」となります。

設問には「言葉を補ってわかりやすく」という指示がありますから、何を「知らないで終わってしまった」のかを補って訳しましょう。

問題文の「新見よう」!

事成りて物ども渡るを、死にたるやうに寝たる者どもなれば、⁽⁴⁾つゆ知らでやみぬ。

冒頭のリード文から、三人は「賀茂の祭りの帰さ」を見物するため牛車で出かけたことがわかります。傍線部の前の記述をたどると「事

成るを待つ」「事成りて物ども渡る」とあり、注にあるように「事成る」は〈齋院の行列がやってくる〉ことを指しています。三人は、賀茂の祭の齋院の行列を待っていたにも関わらず、**祭りの行列が通り過ぎてしまったことをまったく知らないで、行列は終わってしまったというのですね。**

問五 設問条件にあるように、空欄Aには過去の助動詞「けり」が入ります。空欄は文末にあるので本来ならば終止形の「けり」を入れればよいのですが、ここでは前に係助詞「なむ」があるのがポイントです。**係助詞が使われたときに文末が特殊な活用形になることを、「係り結びの法則」といいます。**係助詞によって、文末の結びが連体形になる場合と已然形になる場合があります。

「ぞ・なむ・や・か」……結びは連体形
 「こそ」……結びは已然形

空欄Aは、「なむ」の結びなので、連体形「ける」と活用するのが正解です。

問六 問題文全体の内容を問う問題です。問題文は笑話で、話の落ちが最後に書かれています。落ちに至るまでの話の展開を要約してみましょう。

三人の武士が賀茂の祭の行列を見物するために牛車で出かけたが、車に乗り慣れていなかったため、揺れにほんろうされて耐えられな
 い状態であった。
 ←
 目的地に早く着いたので、車を止めて行列を待っていたが、車酔いで具合が悪くなり、三人とも寝入ってしまった。
 ←
 三人は死んだように寝入っていたので、行列が通りがかつたことにまったく気づかず、すべてが終わって皆が帰り支度をしているときにやっと目を覚ました。

以上をふまえて選択肢を見ていくと、話の展開に合致する選択肢はエです。

選択肢を手エック!

ア 牛車に乗ったことのない三人の武士は、**賀茂の祭をちょうどよい機会と**考えて、**ぜひ牛車を体験してみようと話し合**って牛車に乗った**まではよかつたが、道の途中で牛に振り落とされ**てしまった。

イ 牛車に乗ったことのない三人の武士は、賀茂の祭の行列を見るために初めて牛車に乗ったが、**車の揺れが心地よくてうとうと**してしまい、気づいたときにはすでに行列は通りすぎたあとであった。

ウ 牛車に乗ることに慣れていなかった三人の武士は、賀茂の祭の行列を見るために乗った牛車で**さんざんなめにあい、そのうさばらしに行列を待っている間に酒を飲んで酔いつぶれてし**

また。

工 牛車に乗ることに慣れていなかった三人の武士は、車の中でどのように体のバランスを取ったらよいかわからなかったために具合が悪くなってしまう、賀茂の祭の行列を見のがしてしまった。

アは三人の武士が「ぜひ牛車を体験してみようと話し合って牛車に乗った」、「道の途中で牛に振り落とされてしまった」が問題文に書かれていない内容で不適切です。イは、「車の揺れが心地よくてとうとうとしてしまい」が不適切。三人は車酔いのために疲れ果てて眠ってしまったのであって、気持ちがよくなくて眠ったものではありません。ウは、「うさばらしに行列を待っている間に酒を飲んで酔いっぶれてしまった」が不適切です。三人は車に酔ったのであって、酒に酔ったではありません。

口語訳

紫野に向けて（牛車を）進ませて行くうちに、三人とも、まだ車にも乗ったことのない者たちで（あるので、車の揺れにほんろうされて）、箱のふたに物を入れて振り回すような様子で、三人一緒に振り回され、あるときは車の立板に頭を打ちつけ、あるときはお互いに顔をぶつけ合っただけで倒れたり、うつぶせにうつぶせに目を回して行くなど、まったくまっただけのものではない。こうして紫野に到着して、牛車から牛をはずして車を立てたが、あまり早く（目的地に）着きすぎて（車を）立てたので、行列がやってくるのを待つうちに、この者たちは、車に酔った具合になっていたので、非常に具合が悪くなって、目を回してあらゆる物が逆さまに見える。ひどく酔ってしまったので、三人とも尻を逆さまにして寝入ってしまった。こうしている間に、（時間になって）行列がやって来て通りかかったのだが、死んだように寝ている者たちなので、（祭の行列が通りかかったことを）まったく知らないで終わってしまった。行列が終わって牛車に牛を懸けて（周りの人々が帰り支度であちこち）騒いでいるときになって、目が覚めてはったのであった。

M · E · M · O

要点

漢文・文脈把握

今回の学習すると……

漢文でよくある話の展開について学び、「**文脈**」を正しく把握して**全体の内容を読み取ることが**できるようになります。また、漢文読解の上で重要な「**受身形**」「**使役形**」の句形を正しくつかめるようになります。

【1】漢文における「文脈把握」

複数の人物が登場する漢文の文章で、混乱せずに文脈を把握するには、「人物」と「会話」に着目して本文を読み進めることが重要です。とくに会話文は、**（話者）曰はく、……と。**という形式で示されることがほとんどですので、誰がどのような発言をしているのかを整理しながら、展開を追っていきましょう。

また、漢文の文章では具体例やたとえ話などのエピソードを示し、それをもとに文章全体の主張・意見を展開することが多いため、それぞれの区切りとなる箇所を正しくおさえることも必要となります。

ポイント 漢文における「文脈把握」のコツ

- ・「人物」と「会話」に着目しながら、話の流れをつかむ。
- ・**具体例やたとえ話を示した箇所と、主張・意見を述べている箇所**をそれぞれ分けておさえる。

また、漢文の話の展開として多く用いられるパターンをあらかじめ知っておくと、文章の内容を理解する助けになります。今回は「**問答**」と「**諫言**」という、二つのよくある話の展開を確認しましょう。

●よくある話の展開1 「問答」

「主人公への問いかけと、それに対する主人公からの返答」という形で展開していく文章です。

【基本的な展開】

- 【A】 何らかの事件や事柄が発生する。
- 【B】 主人公が意外な発言、または行動をとる。
- 【C】 周囲の者が、主人公に発言・行動の理由を問う。
- 【D】 主人公が理由を語り、相手を説得する。

※この他に、「思想について登場人物が説得・議論する」(弟子が発した疑問に、先生・師匠が答える)などの展開もあります。

この展開をとる文章では、【D】にあたる主人公の理由説明・説得が、文章全体の主題に直結することが多くあります。また、「**総括**」(まとめ)となる**内容が文末に記される**ことも多いため、注意が必要です。

●よくある話の展開2 「諫言」

「諫言」の「諫」は「諫める」と読み、(自上の人へ) 誤りやよくない点を改めるよう忠告する」という意味があります。漢文では特に、**君主の政策・対応について、臣下が過ちを指摘する**、という展開の文章が多くあることをおさえておきましょう。

【基本的な展開】

- A 何らかの事件や事柄が発生する。
- B 君主がとった対応について、臣下から君主へ指摘する。
- C 臣下の忠告に対し、君主が反応する。
 - ・ 忠告を受け入れて、対応を改める。
 - ・ 忠告を認めず、拒否する。
- D 結果・後日談。

※この他に、〈君主から臣下へ相談し、臣下が答える〉〈臣下の忠告に対し、君主が反対に臣下を教え諭す〉などの展開もあります。

この展開をとる文章では、君主と臣下という二つの異なる立場からの意見が示されますので、**君主と臣下のどちらが理にかなっているのか、筆者はどちらに対して肯定的な評価を下しているのか**、といった点を、問題文の内容を手がかりにして正しくとらえることが重要です。

【2】 句形をおさえる (受身・使役)

漢文の内容を正しくとらえて読解するためには、まずは一文一文を正しく書き下し、解釈できるようになることが必要です。

今回は人物関係を正しくつかむことが求められる、「**受身形**」と「**使役形**」について学んでいきましょう。

●受身形

受身形とは、〈**誰かによって**〉……**される**〉という**受身の関係を表す句形**のことです。とくに中学段階でおさえておきたい用法に、「**為……所……**」を用いた**受身形**と、**受身を表す字である「見」「被」**を用いた**受身形**の二つがあります。

○「**為……所……**」を用いた**受身形**

※**訓**は書き下し文、**意**は口語訳を示します。

為_ニ(A)_ノ所_トB_(スル)
訓 (Aノ) B (スル)と_{ころ}トナル
意 (Aによって) Bされる

例文で確認！

為^ル鳥^ノ所^ト盗^ム肉^ヲ。

訓 鳥^ノ肉^ヲを盗^ムむ所^トと為^ルる。

意 鳥^ノによつて肉^ヲを盗^ムまれる。

王^ヲ為^ス百姓^ノ所^ト敬^ス。

訓 王^ヲ百姓^ノの敬^スする所^トと為^ルる。

意 王^ヲは人々^ノによつて尊敬^スされた。

○「見」「被」を用いた受身形

見 ^ル ……………	訓 ……る・らる
被 ^ル ……………	意 ……される

「見」と「被」は、ここでは同様の意味をもつ字として用いられます。「る」と読むか「らる」と読むかは、古文の助動詞「る」「らる」の使い分けのしかたと同じように、直前の動詞の活用によつて異なり、

- ・四段活用の未然形（Ⅱア段の音で終わるもの）……………「る」
 - ・それ以外の未然形……………「らる」
- となります。

例文で確認！

信^{ニシテ}而^{シテ}見^レ疑^ハ、忠^{ニシテ}而^{シテ}被^レ謗^ス。

訓 信^{ニシテ}にして疑^ハはれ、忠^{ニシテ}にして謗^スらる。

意 信義^ヲを尽くしているのに疑^ハわれ、忠義^ヲを尽くしているのに非難^スされる。

為^ス私闘^者、各^々以^テ輕重^ヲ被^ル刑^セ。

訓 私闘^者を為^スる者は、各^々輕重^ヲを以^テて刑^セらる。

意 私闘^者をした者は、それぞれが（その程度の）輕重^ヲによつて罰せられる。

このほかに、送り仮名のなかで受身の助動詞「る」「らる」が用いられており、文脈上受身で読む必要がある場合があります。この場合、あわせて「於」「乎」などの受身を表す置き字（読まない字）が用いられることが多くありますので、手がかりとして見落とさないようにしましょう。

●使役形

使役形は、〈……に……させる〉というように、人に動作をさせることを表した句形です。

使_二(A)_{ヲシテ} B_(セ)
 (遣・令・教) 意 (Aを・Aに) Bさせる

「使」以外に、「遣」「令」「教」の字を代わりに使うことがあります。「使」以外の字を使った場合は、

・「遣」↓〈(派遣して) ……させる〉

・「令」↓〈(命令して) ……させる〉

・「教」↓〈(教えて) ……させる〉

といった意味合いがそれぞれ付随しますが、いずれも訳出の際には〈…させる〉と訳して問題ありません。また、古文の助動詞「しむ」と同様に、「しム」の直前の語句は未然形で接続します。

例文で確認！

令_二項羽_{ヲシテ} 攻_レ秦_ヲ

訓 項羽をして秦を攻めしむ。

意 項羽に秦の国を攻めさせる。

天帝使_三我_{ヲシテ} 長_二百獸_ニ

訓 天帝我をして百獸に長たらしむ。

意 天の神が私を百獸の王とさせた。

❗ つまずき防止

「だれが」「だれに」動作をさせたのか、注意してとらえましょう。「使(遣・令・教)」の前につく名詞が使役の主体(Ⅱだれが)にあたり、後につく名詞が使役の客体(Ⅰだれに)にあたりますので、それぞれに印をつけて、人物同士の関係を確認するとよいでしょう。

このほかに、「使(遣・令・教)」の使役を表す字が用いられていなくても、書き下し文のなかで使役の助動詞「しむ」が用いられており、文脈上使役で読む必要がある場合もあります。この場合は、「命ジテ」「禁ジテ」など、〈命令・使役〉の意味を含んだ動詞がともに用いられることが多くありますので、あわせて覚えておきましょう。

漢文…文脈把握

例題

問一 受身形に注意して、次の漢文をそれぞれ口語訳しなさい。

(1) 欺^{あざむク}レ人^ヲ者^ハ、却^{かへッテ} 為^ルニ人^ノ所^ト欺^ク。

(2) 吾^{われ}嘗^{かつテ} 二 仕^{ハテ} 三 二 見^{タビ}レ 逐^{おハ}ニ 於^ニ君^ニ。

(3) 不^レ信^ニ 乎^{ゼラレ} 平^ニ 友^ニ。

問二 使役形に注意して、次の漢文をそれぞれ口語訳しなさい。

(1) * 太守^ム遣^ム 三 人^ヲ 往^ニ 長^カ 安^ニ。

注 * 太守⇨郡の長官職のこと。

(2) 秦王^{しんわう}使^ム * 侍^じ 臣^{しん} 求^メ 不^メ 死^ノ 之^ノ 藥^ヲ。

注 * 侍臣⇨側近の臣。

次のページで「解答解説」を確認しましょう。

解説

問一 (1)冒頭の「人を欺く(Ⅱだます)者」が文全体の主語にあたりますが、後半部分で「為^ル(A)所^トB^ニ」という受身形が用いられていることに着目します。ここでは「人の欺く所と為る」と書き下し、(人)によって欺かれる・だまされる」といった意味に訳します。文全体の訳は、(人をだます者は、かえって人にだまされる)となります。

(2)「三たび」は(Ⅲ度・Ⅲ回)の意味。「三見逐於君」では、「見」という受身を表す字が用いられていることに注意します。文の後半は「三たび君に逐はる」と書き下し、(Ⅲ度君主に追放された)となります。「吾嘗て三たび仕へ(Ⅱ私は以前Ⅲ度お仕えし)」でいて、そのたびごとに追放された、というのですね。

(3)「朋友」は(友人)のこと。「信ぜられず」というように、送り仮名のなかに受身の助動詞「られ」(終止形は「らる」)が含まれていることに注意し、「不信」は(信じない)のではなく(信用されない)というように、受身を表す置き字「乎」を用いた受身形として解釈します。文全体であわせて、(友人に信用されない)と訳します。

問二 (1)使役を表す字「遣」が用いられているので、「遣^ム(A)B^ニ」の使役形に着目します。Aにあたるのは「人」で、Bにあたる動作は「往長安(Ⅱ長安に行く)」です。全体の訳は、(太守が人を長安に派遣した・行かせた)となります。

(2)一文が長いので、文全体を正確に書き下したうえで、注意して訳していきます。

まずは返り点に従って文全体を書き下すと、「秦王侍臣をして不死の薬を求めしむ」となります。文全体の主語は「秦王」で、「使」と

いう使役を表す字がありますので、「使^ム(A)B^ニ」のA・Bにあたる内容を考えます。Aにあたるのは「侍臣(Ⅱ側近の臣)」、Bにあたる動作は「求不死之薬(Ⅱ不死の薬を求めする)」で、全体の訳は(秦王は側近の臣に不死の薬を求めさせた)となります。

書き下し文

問一 (1)人を欺く者は、却つて人の欺く所と為る。

(2)吾嘗て三たび仕へて、三たび君に逐はる。

(3)朋友に信ぜられず。

問二 (1)太守人をして長安に往かしむ。

(2)秦王侍臣をして不死の薬を求めしむ。

解答

問一 (1)人をだます者は、かえって人にだまされる。

(2)私は以前Ⅲ度お仕えして、Ⅲ度とも君主に追放された。

(3)友人に信用されない。

問二 (1)太守は人を長安に行かせた。

(2)秦王は側近の臣に不死の薬を求めさせた。

練習問題

次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

鄭人有且置履者。先自度其足，而置之其坐，至之市，而忘操之。已得履，乃曰：「吾忘持度。」反归取之。反及市，遂不得履。人曰：「何不试之以足。」曰：「宁信度，无自信。」

『韓非子』

5

注 * 鄭||古代中国の国の名称。

* 置||「買」と同じ。

* 履||靴の一種。

* 置之其坐||計測した寸法書きを座席に置き。

* 市||市場。

* 已得履||履屋を見つけ、履を買う時になって。

* 度||寸法書き。

* 宁||どちらかといえば。

問 問題文の内容に合致するものを次の中から一つ選び、記号を書きなさい。

ア 鄭人は履を買おうとしたが、あわてて出発したために寸法を計測し忘れてしまった。

イ 鄭人は計測した寸法書きを忘れてしまい、大きさを誤った履を買って帰ってしまった。

ウ 鄭人は自分の足を信じず寸法書きにこだわったために、結局履を買いそこねてしまった。

解説

問 問題文は「鄭人」が市に履を買いに行ったにもかかわらず、履を買い損ねてしまった一連のエピソードの後、4・5行目で、ある「人」が〈どうして足で（じかに）履の大きさを試してみなかったのか〉と問いかけ、「鄭人」が〈寸法書きは信用できるが、自分のからだは信用できない〉と答える、という結びになっています。自分の履を買うというのに、自分の足で試すことをせずに寸法書きに書いた足の大きさにこだわり、結果として履を買うことができなかった「鄭人」の浅はかさが、エピソード全体の主題になっているといえるでしょう。こうした問題文の内容に合致する選択肢はウです。

アは「寸法を計測し忘れてしまった」が誤り。「先づ自ら其の足を度りて、之を其の坐に置き」とあるように、寸法は計測したものの、それを座席に置き忘れてしまった、というのが問題文の内容でした。イは「大きさを誤った履を買って帰ってしまった」が誤り。問題文には「反り帰りて之（＝「度」）を取る……遂に履を得ず」とあり、寸法書きを取りにわざわざ家に帰った結果、戻ってきたときには市はすでに終わっており、「鄭人」は履を買うことができなかったのです。

書き下し文

鄭人（ていひひと）に且（かつ）に履（くつ）を置（か）はむとする者（もの）有り。先（ま）づ自ら（みづか）其（そ）の足（あし）を度（はか）りて、之（これ）を其（そ）の坐（ざ）に置（お）き、市（いち）に之（これ）に之（これ）に至（いた）りて、之（これ）を操（と）るを忘（わす）る。已（す）に履（くつ）を得（え）て乃（すなは）ち曰（い）はく、「吾（われ）度（ど）を持（も）つことを忘（わす）る」と。反（かへ）り帰（かへ）りて之（これ）を取（と）る。反（かへ）に及（およ）びて市（いち）罷（ひ）む、遂（すなは）ち履（くつ）を得（え）ず。人（ひと）曰（い）はく、「何（なん）ぞ之（これ）を試（こころ）みるに足（あし）を以（もつ）てせざる」と。曰（い）はく、「寧（むし）ろ度（ど）を信（しん）ずるも、自（みづか）ら信（しん）ずる無（な）し」と。

口語訳

鄭の国の人で履を買いおうとする者がいた。あらかじめ自分で足の大きさを計り（その寸法書きを持っていこうとしたが）、これ（＝計測した寸法書き）を座席に置き、市へ出かけるようになって、これを持つのを忘れた。そして（履屋を見つければ）履を買う時になってやっと言うには、「私は寸法書きを持ってくるのを忘れた」と。（そこで）家に引き返して寸法書きを持ってきた。（しかし）戻ってみれば市はもう終わり、とうとう履を買いそこねた。ある人が言うには、「どうして足で履の大きさを試してみなかったのか」と。（答えて）言うには、「どちらかといえば寸法書きを（より）信用できるが、自分（のからだ）は信用できなかったのだ」と。

解答

ウ

M · E · M · O

「要点」で学習した内容をふまえて、問題を解いていきましょう。

読解演習

次の漢文を読んで、あとの問に答えなさい（出題の都合により、返り点・送り仮名を省略した箇所があります）。

古代中国では、星座を地上の国々に割り当て、星座と惑星の位置関係によって国の命運が占われており、空の異変は地上の国々の政治のあり方と互いに関連していると考えられていた。

有^リ景公^{景公}者^者。熒惑^{熒惑}嘗^嘗以^以其^其時^時守^守心^心。宋^宋之分^分

野^野景公^{景公}憂^憂之^之。司星^{司星}子韋^{子韋}曰^曰、可^可移^移於^於相^相。公曰^{公曰}、

(4) 相^相吾^吾之^之股肱^{股肱}。曰^曰、可^可移^移於^於民^民。公曰^{公曰}、君^君者^者待^待民^民。

曰^曰、可^可移^移於^於歳^歳。公曰^{公曰}、歳^歳飢^飢。民^民困^困。吾^吾誰^誰為^為。

君^君。子韋^{子韋}曰^曰、天^天高^高。聽^聽卑^卑。君^君有^有君^君人^人之^之言^言。熒惑^{熒惑}

有^有候^候。之^之果^果。徒^徒一^一度^度。『十八史略』

注

*景公Ⅱ古代中国の宋の国の君主。

*熒惑嘗以「其時」守「心」Ⅱ「熒惑」は星の名で火星を指し、災いをもたらす星とされる。「心」は星座の名。「守」は（惑星が）その位置にじつとどまって動かない」という意。

*宋之分野Ⅱ宋の国にあたる（星座の）領域」という意。

*司星子韋Ⅱ「司星」は天体を観測して占う役人。「子韋」は人名。

*相Ⅱ宰相。大臣のこと。

*股肱Ⅱ「股」は（もも）、「肱」は（ひじ）。

*待民Ⅱ人民を必要とする。

*歳Ⅱ一年間の実りの量。

*天Ⅱ天の神。

*候Ⅱ（吉凶を占うために天体を）観測する。

*徙一度Ⅱ一度動いていた。「徙」は（移り動く）意。「度」は角度の単位で、ここでは、一周を三六五度と四分の一としたときの「一度」。

問一 問題文に景公の発言部分として「」をつけることのできる箇所は何箇所ありますか。あてはまる漢数字を書きなさい。

箇所

問二 傍線(1)を書き下し文に直して書きなさい。

問三 傍線(2)の読みを、適切な送り仮名を補ったうえで送り仮名も含めてすべてひらがなで書きなさい。

問四 傍線(3)を、言葉を補ってわかりやすく口語訳しなさい。

問五 傍線(4)はどのようなことを言っているのですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号を書きなさい。

- ア 宰相は部下として大事な存在だから、宰相をひどい目にあわせることはできないということ。
- イ 宰相は思い通りに動いてくれる人物だから、宰相は星占いでもよい結果を出すだろうということ。
- ウ 宰相は身体でいえば手足のようによく働くものだから、子草も怠けず働いてほしいということ。
- エ 宰相は国内で最も重要な立場にいるから、子草をそこに異動させるわけにはいかないということ。

問六 傍線(5)とありますが、ここで景公はどのようなことを言おうとしているのですか。四十字以内で書きなさい。

問七 傍線(6)は「人に君たるの言三有り」と訓読します。この読みにしたがって、漢文に返り点と送り仮名をつけなさい。

有 君 人 之 言 三

次のページで「解答解説」を確認しましょう。

解答

- 問一 三(箇所)
- 問二 其の時を以て心を守る
- 問三 これを
- 問四 火星がもたらす災いを宰相に移せばよい(と)
- 問五 ア
- 問六 自分は民のために君主となっているので、民を苦しめることはできないということ。(38字)
- 問七 有^リ君^{タル}人^ニ之^言三^一

解説

問一 登場人物の発言の箇所をとらえる問題です。問題文には、二人の登場人物がいます。一人は宋の国の君主である景公、もう一人は宋の国の役人である子韋です。そして、この二人の対話が問題文の中で大きな部分を占めています。

漢文では多くの場合、発言は「曰はく、……と。」という形式で記されているので、「曰はく」という表現に注目すれば、発言の始まりの部分はわかりますね。ただし、対話の場面では、人名が短く表記されたり省略されたりすることが多いので、発言した人物が誰であるかを間違えないように注意してとらえることが必要です。

では、問題文の中で「曰^{ハク}」がある場所に注目して、発言を抜き出してみましょう。今回の問題文では、発言の最後の「……」はすべて省略されず記されているので、発言の終わりの箇所もわかりますね。

問題文の「」を見よう！

- 司星子韋曰^{ハク} 「可移於相」
- (景) 公曰^{ハク} 「相吾之股肱」…… 【①】
- (子韋) 曰^{ハク} 「可移於民」
- (景) 公曰^{ハク} 「君者待民」…… 【②】
- (子韋) 曰^{ハク} 「可移於歲」
- (景) 公曰^{ハク} 「歲飢民困。吾誰為君」…… 【③】
- 子韋曰^{ハク} 「天高聽卑。君有君人之言三。熒惑有動」

ここからわかるように、景公の発言部分は「公曰^{ハク}、……」となり、景公は「公」と短く表記されています。景公の発言部分は、①②③の三箇所です。

問二 漢文を書き下し文に改める問題です。まずは返り点に注意して、漢字を読む順番をとらえましょう。傍線部では一・二点とレ点がい用いられていますね。レ点は下の字を先に読んでから一字だけ返って読む記号、一・二点は一点の字を先に読んでから二点の字に返って読む記号ですので、漢字を読む順番に番号を振ると次のようになります。

問題文の「」を見よう！

- ③ 以^テ ① 其^ノ ② 時^ヲ ⑤ 守^ル ④ 心^ヲ

この順で漢字を並べ直した後に、送り仮名を加えます。漢文では送り仮名がカタカナで記されていますが、書き下し文ではひらがなに改めます。すると、「其の時を以て心を守る」となりますね。これで書き下し文は完成です。

問三 語句の読み方を答える問題です。設問には「適切な送り仮名を補うたうえで」という指示があるので、文脈に合うようにするにはどういう送り仮名を付ければよいのかもポイントとなっています。

まず、「之」という漢字については、いくつかの読み方・意味があります。今この段階では最も基本となる次の二つを確実に理解しておきましょう。

- (a) 【読み方】これ 【働き】前に述べた内容を指す代名詞
 (b) 【読み方】の 【働き】主語や連体修飾語を作る助詞

傍線部は(a)のパターンで、前で述べた内容、具体的には〈癸惑（〓火星）が、宋の国にあたる領域である「心」という星座の位置にとどまって動かない〉という天体の現象を指しています。また、傍線部のすぐ上の字は「憂ふ」と読み、〈心配する・おそれる・かなしむ〉という意味の言葉です。以上から、傍線部の「之」には「之を（憂ふ）」と送り仮名を付け、傍線部を含む一文は〈景公が天体の現象のことを心配している〉という意味で解釈するのが適切であるとわかりますね。設問の指示に従って、送り仮名も含めてすべてひらがなで読み方を書くと「これを」となります。

問四 傍線部を口語訳する問題です。ただし、「言葉を補ってわかりやすく」という指示があることに注意しましょう。つまり、傍線部だけでは省略された表現があつてわかりにくいということですから、何が省略されているのかをとらえることがポイントとなります。

まず傍線部を書き下し文にすると、「相に移すべし（と）」となります。「相」は注を見ると〈宰相・大臣〉という意味だとわかりますね。

しかし、「移^ス」が〈何を・どこへ〉移す〉ことなのかがわからなければ、具体的にどのような意味であるかを示すことはできません。また、「可^シ」は〈……することができ（る）〉〈……するのが適当だ〉〈……してもよい〉など、さまざまな意味があるので、どの意味でとらえるのがよいかは文脈から判断しなければなりません。

まずは、「移^ス」とはどういうことかをとらえましょう。その際、傍線部と似た表現が問題文中にほかにもあることが手がかりになります。とくに、次の箇所注目するとよいでしょう。

問題文の「可^シ」を見よ！

（子韋）曰はく、「歳に移すべし」と。

〓子韋が言うことには、「（それでは）一年間の実りの量に移せばよい」と。

（景）公曰はく、「歳飢うれば民困しむ。……」と。

〓景公が言うことには、「実りの量がとぼしければ人民が苦しむ。……」と。

つまり、傍線部でも話題になっている〈何か〉を「歳（〓一年間の実りの量）」に「移す」と、人民が苦しむという悪い結果が訪れるのですね。ということは、この〈何か〉は、苦しみをもたらす悪いものだ、と推測することができます。

注を見ると、「癸惑（〓火星）」は「災いをもたらす星」だと説明されていることがわかります。そして、「癸惑」はまさに景公が君主を務めている宋の国の領域にじつとどまつているのでした。つまり、景公は〈火星が宋の国に災いをもたらす〉ことを心配しているのであり、その様子を見た子韋は、〈火星がもたらす災いを、身代わりとなる何かに移せばよい〉と提案しているのです。

以上から、傍線部は、「火星がもたらす災いを宰相に移せばよい」ということを述べているとわかります。宋の国全体、あるいはその君主である景公が災いをこうむる代わりに、その身代わりとして「相（＝宰相）」、「民（＝人民）」、「歳（＝一年間の実りの量）」に災いを移してみるとよいのではないかと、子草が提案しているのですね。

問五 傍線部の内容説明問題です。

傍線部を書き下し文にすると、「相は吾の股肱なり」となります。「股肱」は、注を見ると「ももとひじ」という意味だとわかりますね。しかし、「宰相は私のももとひじである」というのでは意味がよくわかりません。

ここでは、「ももとひじ」とは何の比喩であるのかと考えることが必要です。「もも」や「ひじ」は、言い換えれば「手足」の一部分です。胴体や頭といった身体の中核からみれば末端に近い部分ではあるものの、胴体は単独で何かの用事を果たすことはできず、足の助けを借りて移動したり、手の助けを借りて何かを持ってきたりすることができます。つまり、「もも」や「ひじ」は、「ものごとの中核ではないが、中核にとって欠かせない重要な役割を果たすもの」であると考えるられますね。傍線部が、宋の国の君主である景公の発言であることもあわせて考えると、景公にとっての「もも」や「ひじ」とは、君主自身ではないけれども重要な働きをする存在、つまり「大事な家臣」を指しているのだと考えることができます。

他方で、傍線部の景公の発言は、「火星がもたらす災いを宰相に移すのがよい」という子草の提案を受けたものであることにも注目しましょう。つまり、子草は「国や君主が災いを受けることを避けるためには、（身代わりとして）宰相に災いを移し替えればよい」と提案し

ているのですが、景公はそれを聞いた上で、「宰相は私にとって欠かせない役割を果たしてくれる大事な家臣だ」と答えているのです。要するに、「宰相は大事な家臣だから、災いを負わせるわけにはいかない」と、子草の提案を断っているのですね。

以上をふまえて選択肢を検討すると、最も適切なものはアです。

選択肢を手エック!

ア 宰相は部下として大事な存在だから、宰相をひどい目にあわせることはできないということ。

イ 宰相は思い通りに動いてくれる人物だから、宰相は星占いでよい結果を出すだろうということ。

ウ 宰相は身体でいえば手足のようによく働くものだから、子草も怠けず働いてほしいということ。

エ 宰相は国内で最も重要な立場にいるから、子草をそこに異動させるわけにはいかないということ。

イは、宰相が「星占い」を行うかのように述べている点が誤りです。「星占い」は子草の仕事であり、宰相の仕事ではありません。

ウは、「子草も怠けず働いてほしい」という箇所が、子草の提案に対する受け答えとして不適切です。

エも、「子草を……異動させるわけにはいかない」という箇所が、子草の提案に対する答えとしてかみ合っていないです。

問六 傍線部の内容に関する説明問題です。傍線部の単純な口語訳が求められているのではなく、文脈をふまえた傍線部の意味内容が問われていることに注意しましょう。

まず、傍線部を口語訳してみましよう。傍線部の書き下し文は「吾は誰が為にか君たる」となります。直訳すると、「私はだれのために君主となっているのか」となります。

傍線部は君主である景公の発言ですが、ここで景公は、「自分自身のだれのために君主を務めるべきか」、言い換えれば「君主の役割をまったく理解できていないのではありません。この傍線部のように、わからないことを直接尋ねるのではない意図で用いられる疑問文を、修辞疑問といいます（ちなみに、「どうして……だろうか」「いや、……であるはずがない」という形式をとる反語も、修辞疑問の一種です）。修辞疑問には、文の表面的な意味の裏側に、話し手の隠された意図が込められています。そこで、文脈をふまえてその意図を読み解くことが必要です。

傍線部は、「火星がもたらす災いを、一年間の実りの量に移せばよい」という子章の提案に答えた言葉です。そして、傍線部の直前で景公は、「歳飢うれば民困しむ（＝実りの量がとぼしければ人民が苦しむ）」と指摘しています。つまり、「子章の提案の通りにすると、人民が苦しむ結果につながる」と述べた上で、傍線部の発言を行っています。ここからは、「人民の暮らしぶりに対して深い思いやりをかける君主」という特徴を読み取ることができるでしょう（さらに前の箇所でも、景公は「君は民に待つ（＝君主は人民を必要としている）」と述べているので、人民を大切だと考えていることがわかります）。

したがって傍線部も、「景公の人民に対する思いやり」という発言の意図を念頭において解釈する必要があります。すると、「私はだれのために君主となっているのか」という発言の裏側には、「ほかのだれのためでもなく、人民のために君主となっている」という気持ちも込められているととらえることができるでしょう。そして、火星がも

たらす災いを移して実りの量を減らすことで、大切な人民を苦しめることはできない、というのが景公の発言の意図であると考えられます。以上のことを字数以内にまとめて解答しましょう。

○つけのポイント

- ① 民のために君主になっている」という景公の発言の趣旨が書かれているか。
- ② 自分は民のために君主となっているので、民を苦しめることはできないということ。

② 民を苦しめることはできない」という景公の発言の意図が書かれているか。

- ③ 文末の形は「……こと。」など、体言＋「。」になっているか。

こんな解答は△

△私は人民のためでなければ、果たしてだれのために君主になっているのかということ。(39字)

*傍線部の直訳に近い答案で、②の内容が不足しています。口語訳問題ではないので①にあたる内容は簡潔にまとめ、「民を苦しめることはできない」という景公の意図を説明しましょう。

問七 漢文に返り点と送り仮名を付ける問題です。最初に漢文の漢字をどういう順序で読めばよいかを考えてから、その順序に合うように返り点を付けていきましょう。

まず、傍線部の漢文と設問文の書き下し文を見比べて、漢字を読む順序を考えてみましょう。書き下し文では助詞・助動詞はひらがなで書くため、書き下し文の「君たるの言」の「の」という助詞が、漢文では「之」にあたることに気づくことが大きなポイントです。

問題文の「」を見よ！

⑥ ② ① ③ ④ ⑤
有 君 人 之 言 三

では、この順序に合うように返り点を付けていきましょう。返り点は、読む順序が下から上に向かう箇所につけます。逆に言うと、上から下に読んでいけばよい箇所には、返り点は付けません。また、①が三文字目にあるので最初の二字は飛ばして読むことになりませんが、①を読むために順序が下から上に向かっているわけではないので、①には特に返り点をつける必要はありません。

・①↓②は、先に①「人」を読んでから、一字上の②「君」に返っています。一字だけ返る場合はレ点を使うので、②「君」の左下に「レ」点を付けます。

・②↓③は、飛ばしている漢字はありますが、上から下に読んでいるので返り点は付けません。③↓④、④↓⑤も、上から下に読んでるので返り点は不要です。

・⑤↓⑥は、先に⑤「三」を読んでから、五字上の⑥「有」に返っています。二字以上返る場合は一・二点を使うので、⑤「三」の左下に「二」点を、⑥「有」の左下に「二」点を付けます。

以上で、漢文に返り点を付けることはできました。次に、送り仮名を漢字の右下にカタカナで付けます。書き下し文は「人に君たるの言三有り」となっており、「の」は先ほどの③にあたるので、残ったひらがなの「に」「たる」「り」をカタカナに改めて、漢文に書き加えます。「人」の右下に「ニ」を、「君」の右下に「タル」を、「有」の右下に「リ」をそれぞれ書き加えれば完成です。

書き下し文

景公といふ者有り。癸惑嘗て其の時を以て心を守る。心は宋の分野なり。景公之を憂ふ。司星子韋曰はく、「相に移すべし」と。公曰はく、「相は吾の股肱なり」と。曰はく、「民に移すべし」と。公曰はく、「君は民に待つ」と。曰はく、「歳に移すべし」と。公曰はく、「歳飢うれば民困しむ。吾は誰が為にか君たる」と。子韋曰はく、「天は高くして卑きに聴く。君は人に君たるの言三有り。癸惑動くこと有らんと。之を候するに、果たして徙ること一度なり。」

口語訳

景公という者がいた。(ある年、災いをもたらすという)火星がちょうどその時に心という星座の位置にじつとどまって動かなかった。心は宋の国にあたる領域の星座である。景公はこのことを心配した。天体を観測して占う役人である子韋が言うことには、「(火星によつてもたらされる災いを)宰相に移せばよい」と。景公が言うことには、「宰相は私の手足(ともいうべき大事な部下)である(から、そのようなことはできない)」と。(子韋が)言うことには、「(それでは)人民に移せばよい」と。景公が言うことには、「君主は人民を必要とするものである(から、そのようなことはできない)」と。(子韋が)言うこ

とには、「(それでは)一年間の実りの量に移せばよい」と。景公が言うことには、「実りの量がとぼしければ人民が苦しむ。私はだれのために君主となつていふのか(、ほかのだれのためでもなく人民のためであるから、人民を苦しめるようなことはできない)」と。子韋が言うことには、「天の神は高いところになりながら、低いところ(＝地上)のことを(のがさず)お聞きになつて(、そのよしあしに応じた恵みや災いを与えて)います。あなたは人の上に立つ君主としての(その地位にふさわしい)言葉を二度おつしやいました。(天の神はこれをお聞きになつていふはずなので、災いの元凶となる)火星はきつと動くでしょう」と。(そこで子韋が占いのために)天体を観測してみると、やはり(火星は)一度動いていた。